東亜同文書院大旅行調査と植民地台湾：書院生が経験した「日本」

The Great Journeys of Toa Dobun Shoin College to Colonial Taiwan: Experience of "Japan" on the Periphery of the Empire

岩田　晋典

IWATA Shinske

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: shinskeiwata@gmail.com

Abstract

The Great Journeys were months-long field researchs conducted from 1907 to 1944 by Toa Dobun Shoin College students as completion of their study. While the trips were carried out mostly in the Chinese continent, only limited number of research teams passed or visited Taiwan, a Japanese colony at that time, and those who elected the island to a primary destination were an entire minority. This paper examines why Taiwan was not favored as the main field of the Great Journey. The reports written by the students show that they were not interested in Chinese part of the island. Instead, they inspected activity of Japan's colonial enterprises, enjoyed Japanese foods, hot springs as well as townscapes, and were surprised at "modernization" as well as "civilization" implemented by Japanese Empire. Thus, Taiwan was regarded as a part of Japan rather than China and that is the reason why Taiwan was rarely chosen as the main field of the Great Journey by the Toa Dobun Shoin students who had specialized in China studies.

Ⅰ．はじめに

東亜同文書院（1939 年以降は東亜同文書院大学）が重視した教育法に、中国大陸部を中心にアジア東部において 3 カ月から 6 カ月にかけて実施したフィールドワーク、「大旅行」がある [1)]。大旅行は 1907 年（第 5 期生）から 1944 年（第 44 期生）まで行われ、コースとしては計 700 にまで達しており、「世界的にみても類をみないし、世界最大規模の調査」であった（藤田、2012：136-137）。

1）大旅行の全体像については（藤田、2007）を参照。

大旅行の研究は、本学関係者を中心に着実に進展しているものの、地理的に言えば考察の重点は中国大陸に置かれてきた。大多数が大陸内で実施されたことからすれば、それは当然のことと考えるべきであるが、台湾を訪れたものも複数見受けられる。台湾は、上海から南方面に向かう途中や帰路に立ち寄る場所として、けっして珍しい寄港地ではなかったようだ。中には、台湾自体を調査対象に据えた班もわずかながら存在している。

本論の目的は、大旅行で台湾を訪問した書院生による記録に焦点を当て、台湾が調査目的地に選定されにくかった要因を探ることにある。本論では、オンデマンド版として復刻されている『東亜同文書院大旅行誌』（第 5 期生・1907 年から第 40 期生・1942 年までの計 33 巻）をもとに[2)]、彼らの台湾訪問の傾向と台湾における経験談をとおして“大旅行調査における台湾”について考えてみたい。

Ⅱ．台湾訪問の概要

1．訪問の回数

まず回数からみると、台湾を含む路線は 78 個確認することができる。『東亜同文書院大旅行誌』に記載された約 630 路線のうち 12％ほどが台湾の地を踏んでいることになる。この中には、単なる寄港の場合もあれば、主要な調査目的地の一つに台湾が加えていた場合もある。

前者には、調査目的地から上海に帰る途中に寄港する場所として「台湾」の名が挙げられているだけのケースや、地図や経路概略から寄港が把握できるものの本文には台湾に関する記述が一切現れないケース（第 11 期生・1913 年）なども含まれる。

後者、すなわち台湾が主な調査目的地に据えられた好例は、第 29 期生による 1932 年の調査であろう。この調査は、広州・香港・マカオとともに台湾を調査するものであった。高雄から日月潭を通って基隆まで、南北を縦断している。『大旅行誌』には「南華・台湾の旅」というタイトルの調査報告が収められている。

2．回数の推移

台湾を訪問した路線数の割合を年度ごとに見ると、少ない年度では全体の 3.8％（第 31 期生・1934 年）、多いときは 31％（第 34 期生・1937 年）というように数字に開きがあり、また、毎年のように大きな増減を繰り返している。

こうした推移の中に、増加していると言い切れるような変化を見出すことは難しいの

2）以下本論で、「第 31 期生・1934 年」というように、期数と西暦を並置した場合、西暦は大旅行が実施された年を指す。また、書院生の活動に西暦が付随して記載されている場合も、基本的に調査が実施された暦年を示すと理解されたい。

であるが、第29期生・1932年と第30期生・1933年がそれぞれ「南華・台湾の旅」・「A TRIP TO THE SOUTH」というまとまった報告を残している点や、第32期生・1935年から第35期生・1938年まで各年度の全路線数の中で台湾を訪問するものの割合が13.6%、16%、31%、13.3%というように、盛り上がりを示している点は注目に値する。

この時期はちょうど、藤田が言う大旅行の「制約期」（1930年代）に当たる（藤田、2011：67-69）。日中関係の悪化によって大旅行の実施が、とくに大陸内部において限定されるようになった期間である。その結果、台湾を訪問するコースが増加したという背景があるのかもしれない[3)]。

また、いわゆる南進論の存在も見逃すことが出来ない。台湾総督府は20世紀初めから南洋研究を開始していた。1923年の関東大震災や1927年の金融恐慌により南方進出も危機的な状況に陥ったが、総督府は台湾銀行を救済するなど積極的な対策に取り組み、「1932年には南洋貿易は回復し始めた」（曹、2007：250 － 251）。また、帝国日本の国政レベルでは、1936年に初めて「国策」として認知されている（近藤、1996：109）。

上述の盛り上がりは、こうした時代背景とともに考える必要があろう。

３．台湾旅行の経路

それでは、書院生はどのような経路で台湾に入り、島内を回ったのか。ここでは概要を記したい[4)]。

台湾への旅行では、香港や広東、マカオ、厦門、福州と台湾側を結ぶ航路が利用された。そのため、台湾訪問は、ほぼすべてが上海と中国大陸南部や東南アジアの間を船舶で移動する路線の一部として実施された。

台湾の玄関口は基本的に基隆であった。初期には1911年に台北郊外の淡水で上陸した第9期生のケースがあるし、1928年の第25期生のように高雄が利用されたこともあったが、ほとんどの場合書院生は基隆から上陸し、鉄道で台北に移動した[5)]。

基隆－台北ルートを使った台湾滞在の旅程は、台北に滞在してすぐに基隆に引き返す場合と台北からさらに台湾南部に進む場合に分かれる。前者の場合、台北市街とその近郊（北投や烏来など）を視察して、基隆に引き返し、そこから次の目的地に向けて出航するというパターンになる。

3）藤田は他に、日中関係の緊張の中で1926年第24期生から国外コースが増加することを指摘している（藤田、1998：644-645）。それに対して加納によれば、東南アジア方面の調査は「制約期」に縮小している（加納、2013）。

4）大陸だけではなく東南アジアも含めた大旅行の地理的範囲における台湾の位置づけについては今後の課題とする。

5）淡水港は、基隆港の整備が進み、その輸送量が増大するのと反比例する形で衰退していった（高、1999：70）。

台北からさらに足を伸ばす後者の場合、主な訪問地になったのは台湾西部の台中や嘉義、台南、高雄などの都市と各都市の近郊であった[6)]。これらの都市はすべて、台湾西部を南北に走る大動脈、鉄道「縦貫線」で結ばれており、それぞれ地方政治や経済の中心地であった。すなわち、各市の政庁やインフラ設備、台南の精糖会社、嘉義の製材所などのように、書院生が視察を行うのに適した場所が鉄路線上に点在していた。

また書院生は軽便鉄道や「台車」(一般道路上に敷設された簡易軌道の上を人力によって走るトロッコ）も利用している（図 1)。「台車」は鉄道網から枝分かれするような形

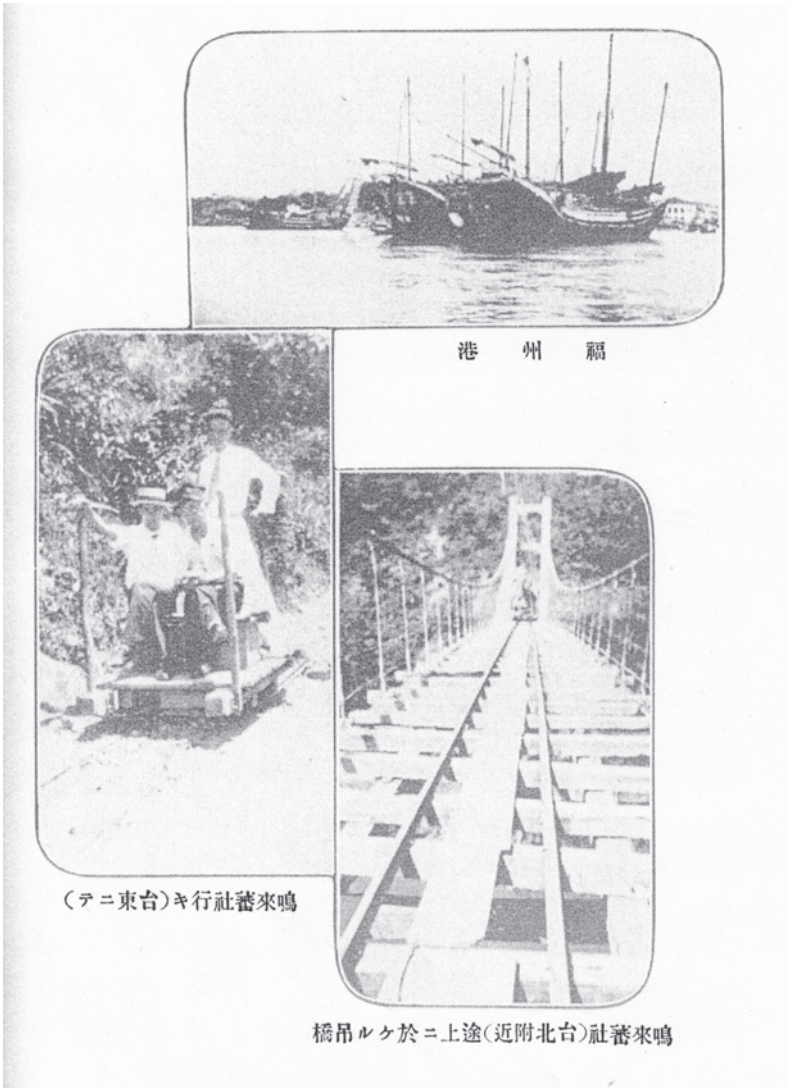

図 1　台車（第 28 期生・南支沿岸遊歴班の旅行記「港から港へ」より）

6）1932 年第 30 期生の南支沿岸台湾調査班のように時計回りに台湾を一周する稀有な例もあった。

で無数に広がっていた。これらの鉄道は、当時の台湾で地方交通として欠かせない交通手段であり、庶民を含めた幅広い層によって利用されていた[7)]。

政治経済の要所を連結し、さらに網の目のように広がる鉄道ネットワークの上を書院生は活発に動き回ったのである。

書院生が縦貫線を駆使した具体例を引いてみよう（図 2）。第 20 期生は、1922 年 7 月 1 日から 8 日までの 1 週間ほどの間に弾丸ツアーと呼んでもさしつかえがない旅行を敢行している。7 月初旬の暑い最中、まず基隆から台北へ移動し、台北から烏来へ 1 泊旅行をし、台北から台中経由で嘉義に行き、さらに高雄まで下ると、きびすを返して台南

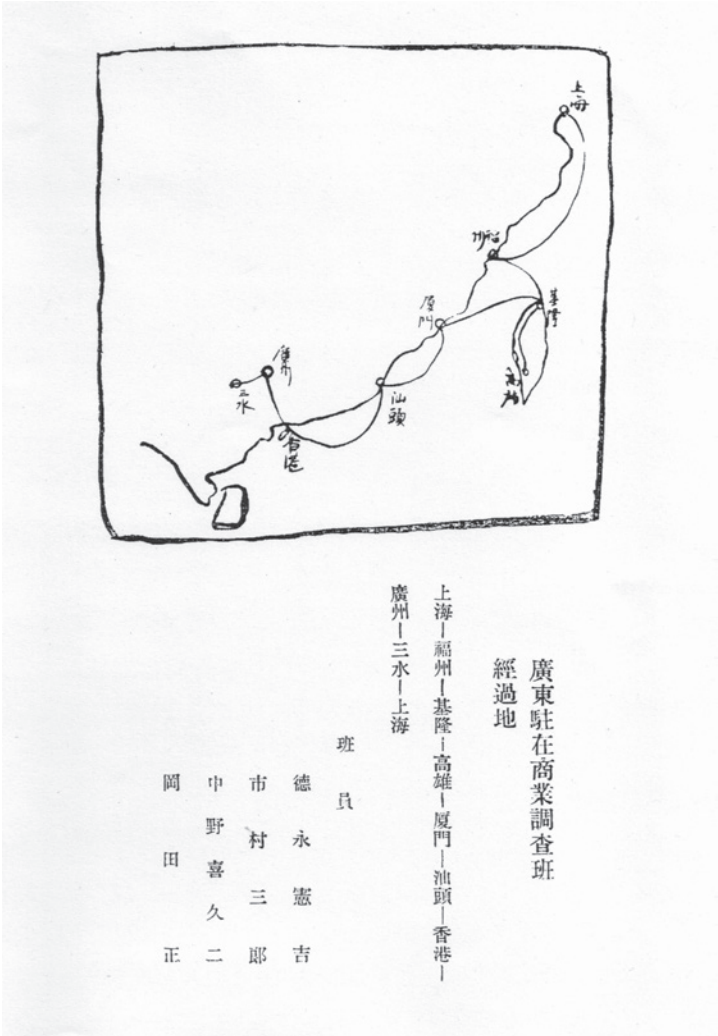

図 2　第 20 期生・広東駐在商業調査班の旅行ルート（旅行記「粤南閩水」より）

7）詳しくは（片倉、2010：114-125）を参照。

へ、そして再び台中、台北と戻った上で基隆から香港に向けて出航するというものである。また、書院生の中には、1916 年の第 14 期生のように鉄道部から「鉄道パス」を融通してもらった者もいた。

最後に台湾を去るケースについて触れておきたい。台湾からの行き先は、上海･厦門･香港など調査班の旅程次第で異なっており、多様である。中には、基隆で上海帰還組と内地帰国組に分かれる場合のように（第 13 期生・1915 年、第 14 期生）、日本が次の移動先になることもあった。

４．台北の訪問場所

ここでは台湾に上陸した調査班すべてが向かった台北に注目し、書院生が注目した事物や場所について概観してみよう。

書院生の多くが記述しているのが、近代都市としての台北の姿である。肯定的なものが多く、たとえば 1909 年に訪台した第 7 期生は台北のインフラについて「これが数年前迄汚穢なる支那街と藪澤の地だったとは想像することが出来ぬ」と記した上で、台湾社会の発展振りについて「これ我国民が殖民的才能あるを證明せるものに非ずして何ぞや」と感嘆している。

また台北を「小巴里」と称える書院生もいる（第 16 期生・1918 年や第 20 期生・1922 年）。整然と区画され、ルネッサンス建築が立ち並び、公園や銅像であふれる様子が、かのパリのイメージに合うということのようだ。

台北に滞在した書院生が必ずと言ってよいほど訪れたのが、台湾神社（現在の圓山大飯店の場所）と郊外の北投温泉である。この二つの観光名所はともに台北中心部から北方に位置し、台北駅から淡水線（1901 年開通）・新北投線（1916 年開通）を使って簡単にアクセスできた。そのため、両名所をまとめて日帰り旅行をする書院生は少なくなかった。

北投温泉は、日本植民地下で成長した観光地である。立ち並ぶ旅館では日本人植民者が宴会を開き、「日本人による特権的な遊興空間」、「民間植民者たちによって移植された文化租界」という体をなしていた（曽山、2003：284 － 286）。そもそも宴会という会食スタイルは、台湾領有後すぐに台北城内外で日本人飲食店が多数営業を開始し、宴会の会場となったことが示すように、植民地台湾に導入された「内地」の食文化に他ならなかった（曾、2011：214）。

もう一つ人気があった場所は、郊外の烏来である。烏来は、台北から容易に訪ねることができる「蕃社」[8] としてよく知られていたようだ。「容易に」と言っても、それは

8）ここでは「蕃人すなわち台湾先住民の村落」と理解しておけばよい。「蕃人」については後述する。

相対的なものであり、烏来を訪問した書院生の記述には、険しい山を越え谷を渡り、やっとのことで烏来にたどり着いたというように、移動の辛さ（そして途中で見た美しい景色）を強調したものが目立つ。

Ⅲ．台湾経験の４つのポイント

以上を踏まえた上で、書院生がどのように台湾を経験していたのかについて、4 つのポイントに分けて考察してみたい。

1．「日本」としての台湾

先に引いた「これ我国民が殖民的才能あるを證明せるものに非ずして何ぞや」という言葉は、1895 年の台湾割譲の 14 年後の 1909 年に台湾を訪問した第 7 期生によるものである。この第 7 期生は「今日は愈我大日本領土に足を入れるかと思へば勇躍を禁ずる能はず」とも語っている。

このように台湾を日本の一部に数える記述は少なくない。第 10 期生は 1912 年に高雄から上陸して「二年ぶりに母国の地を踏んだ」と語っているし、1916 年に訪台した第 14 期生は「吾日本の地」で「実に親しい懐かしい感」を抱いている。「ただ日本であるという事実」に喜んでいるのは 1917 年の第 15 期生だ。

「まるで探検隊」のように中国大陸を歩む大旅行は「まぎれもなく冒険旅行」であった（藤田、2000：14 － 15）。それを生き抜いてきた若者にとって、台湾は「油脂臭い支那」とは異なる常夏の国であるばかりか、「何と云ふても日本の地」、「懐かしの故国」であり、「日本氣分」があふれていて、「治台政策の効果」による「全くの安楽境」だったのである。

しかしながら台湾は、つねに「日本」を味わうための訪問地として選ばれたのではなく、そのときの政情によってやむを得ず選択されたこともあった。たとえば、1931 年の満州事変によって中華民国政府が以後 2 年間ビザを発給しなかったために、1932 年の第 29 期生ならびに 1933 年の第 30 期生は調査地域の限定･変更を余儀なくされており、落胆した彼らの一部が調査地に選んだのが香港・台湾であった（藤田、2012：148）。

いずれにしても、台湾で「日本」を経験するという傾向は書院生が訪問した場所にも表れている。書院生が視察したのは、「本島人」（台湾の漢人、戦後の「本省人」）の政治経済や生活文化ではない。1930 年の第 27 期生や 1932 年の第 29 期生のように艋舺や大稲埕を視察したわずかな例もあるが、書院生のほとんどが目を向けたのは、むしろ台湾の日本企業であり、大日本帝国の植民地統治であった。台北をはじめとする各地の日本企業では東亜同文書院卒業生が勤務しており、書院生の中には彼ら卒業生の世話にな

る者もいた[9)]。

観光対象についても同様のことが言える。1930年代には台湾人が観光を楽しむようになり、廟や祭礼が台湾のツーリズムの発展を促すようになったものの、書院生が訪問場所として記録したのは台湾神社であったり、台南神社（北白川宮終焉の地）というように、蕃社をのぞけばもっぱら日本に関連するものであった。1924年に調査した第21期生の旅行誌には鄭成功廟の写真が掲載されており（図3）、彼らが台湾滞在時に訪問

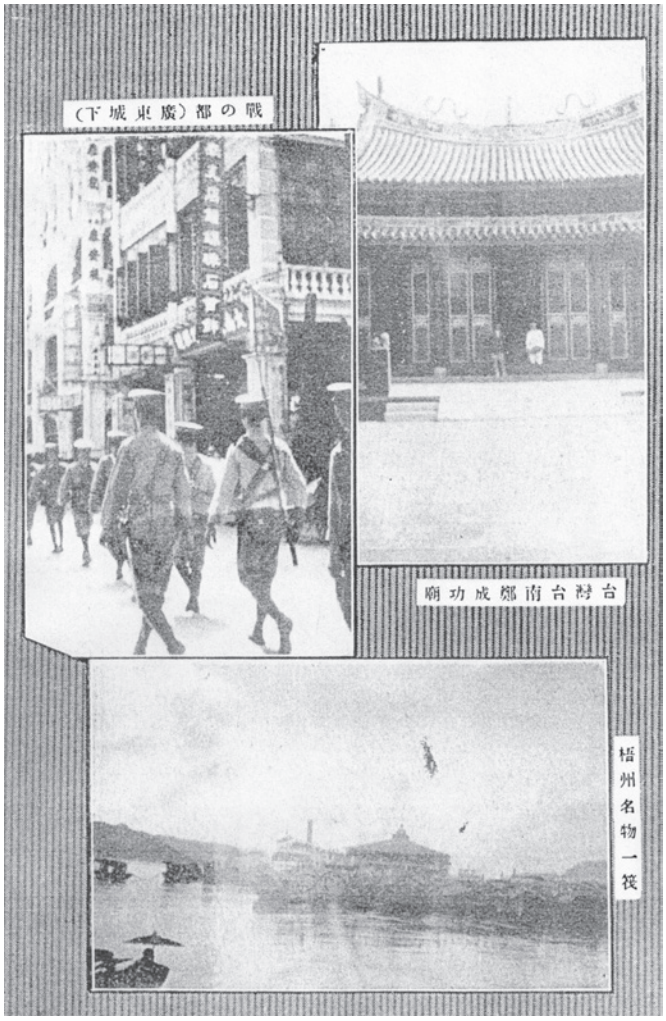

図３　第20期生・南支沿岸産業貿易班の旅行記「閩南粤水」に掲載された鄭成功廟の写真（右上）

9）東亜同文書院卒業生の中には、語学力や専門的知識を活かして台湾で大手銀行･企業に勤務する者がいた。具体的な事例は、（卞、2013：129-132）を参照。さらに書院生以外も含めたネットワークを考えると、上海から台湾に赴任・転勤した者はかなりの数であったことが推測される。書院生がそうしたネットワークを活用したと考える方が妥当であろう。

したことが推測されるが、本文では基隆・台北・烏来での経験のみが記されており、同廟については一切記述がない。

このように、台湾の「支那」としての側面はほとんど省みられなかったと言っていい。

2．台湾の評価

次に、台湾に対する評価をポジティブなものとネガティブなものに整理してみよう。

まずポジティブなものには前項で述べた台湾の日本性に関するものがあるが、そのほかに、台湾の近代性も頻繁に賞賛の対象になることは協調しておかなくてはならない。社会が安定し、インフラが充実し、産業が発達する台湾というイメージである。

その基盤になっているのが文明／日本と未開／支那という植民地主義的な二項対立であることは言うまでもない。台湾は、「原始の野に文明の斑点を落せる如し」（第 18 期生・1920 年）である。また、先に引用した「これが数年前迄汚穢なる支那街と藪澤の地だったとは想像することが出来ぬ」という第 7 期生のことばに見るように、この二項対立が衛生・身体に関するレトリックで描写されていることも興味深い。

いずれにしても中心都市台北は、「日本の何処へ持ち出しても、恥しくないだけの体裁を充分備へて居る」（第 30 期生・1933 年）。1918 年に調査した第 16 期生に言わせれば、大日本帝国は東洋人にも植民地経営ができることを世界に示したのである。こうした認識は大袈裟なものではなかったようで、1927 年に台湾を現地調査した矢内原忠雄も、古典『帝国主義下の台湾』（1929 年刊行）の中で「我が植民政策の成功として、内外の驚嘆を博したるところ」（矢内原、2001：36）と記している[10)]。

次にネガティブな評価について考えてみよう。多くの書院生にとって台湾は「憧憬」の地であった。けれどもそれは、台湾がただ賞賛の対象になったというわけではない。

たしかに日本の植民地統治ならびにその成功例としての台湾をほとんど手ばなしで褒め称える例もあるが、書院生の中には、温泉につかったり浴衣で散歩をしたりして「日本」を楽しみつつも、植民地台湾に対して批判的な考察を加える者もいた。

たとえば、台北はこれ以上を要求できないくらい発達しているが、同時に「虚無的」であると述べる書院生（第 15 期生・1917 年）がいる。台北の街には銅像が多数設置されていたようで、無意味な銅像を建てているという総督府への批判も（第 20 期生・1922 年）、この「虚無的」な雰囲気に数えることができるのかもしれない。

さらに、それに関連していると思われるものとして、台湾の官僚主義への批判も珍しくない。官僚が幅を利かせているという批判や、上陸時の入国審査とくに税関への不満である。1932 年に入国した第 29 期生は高雄での経験談の中で、「とても鼻息の荒い台

10）矢内原の現地調査の時期と内容については、（若林、2001）を参照されたい。

湾の御役人様達が、豚でも追ふ様」に本島人を怒鳴り飛ばしていたこと、私服憲兵の「あまりのしつこさと猜疑的な態度」や「甚だ、むかつく税関検査」によって台湾の第一印象がひどく害されたことを記している。

こうしてみると、ポジティブな評価でもネガティブな評価でも、ともに近代化・植民地化が問題になっていることが分かる。つまり、台湾の現状を近代化・植民地化が順調に進展しているものと捉える場合、ポジティブな評価となる。逆に、近代化・植民地化がうまくいっていないと思える場合、ネガティブな評価が下されることになる。

台湾を訪れた書院生が残した記述の中でおそらくもっとも辛らつなものは、1920年の第18期生によるものであろう。それによれば、日本がちぐはぐな折衷文明であるために台湾もちくはぐになっている。台北の総統府の建物や児玉源太郎や後藤新平の銅像などすべてが悪趣味であり、もはや「昔しの高砂島乃至フォルモサの面影」は失われてしまっているのである。

3．本島人

さきに台湾を日本の一部とみなす姿勢が強いことを指摘したが、だからといって本島人が日本人とみなされているわけではない。「日本人」に対する「本島人」という範疇の使用がすでに物語っているように、そこには一定の境界が設けられている。

植民地台湾の人々が日本化したことを称える書院生は少なくない。しかし、いくら日本化したとしてもその人は「流暢な日本語を話す本島人」なのであり、「我ら日本人」なのではない。

第29期生・1932年は、日本人は本島人に対して「侮蔑的態度」を持って臨むことがあり、いくら「同化主義」を唱えても、こうした「封建的なプライド」が保持されるかぎり、台湾を「平和な楽土郷」に変えることはできないと現状を批判している。また、第15期生・1917年のように、「支那人」の日本化に喜びつつも、それが日本人を凌駕する存在になることを危惧する例もある。こうした日本化と差別化の共存は、植民地体制に典型的な「同化と排除の二重性」（水野、2004）、あるいは「包摂と排除」（小熊、1998）のミクロな表れだと言ってよかろう。

ただし、台湾に関する記述全体の中で本島人に関するものが目立たない点は注目に値する。人口に関して言えば、1927年の台湾の人口構成は内地人（日本人）4.7％・本島人92.4％・生蕃人2％・外国人0.9％となっているが（矢内原、2001：235）、こうした人口比が示す本島人のボリュームと記述面での存在感の無さには著しいギャップがある。書院生は本島人の経済活動にはほとんど関心を示さず、台湾滞在の記述はもっぱら、植民地台湾内部の「日本」に当てられている。

4．蕃人

台湾で書院生が出会うエスニックな他者として「本島人」のほかに重要なのが「蕃人」である（煩雑さを避けるため、以下ではカギ括弧抜きで表記する）。旅行誌の中で本島人の描写がわずかであるのに対して、蕃人が登場することは珍しくない。

台湾に蕃人と呼ばれる人々がいることは、当時の日本人にとってすでに常識的知識となっていたと言えよう。まずは「人食い人種」というイメージの流布である。1871 年の牡丹社事件に従軍した記者・岸田吟香がパイワン族を「首狩りの人食い人種」と報じた後、このステレオタイプは新聞や通俗的な読み本を通して誇張され、“蕃人＝人食い人種”という他者観は普及していった（山路、2008：25 － 38）

また、博覧会イベントにおける植民地主義的表象に関する多くの研究が論じてきたように[11]、帝国日本で繰り返し開催された博覧会や類似の展覧会では、蕃人などの「野

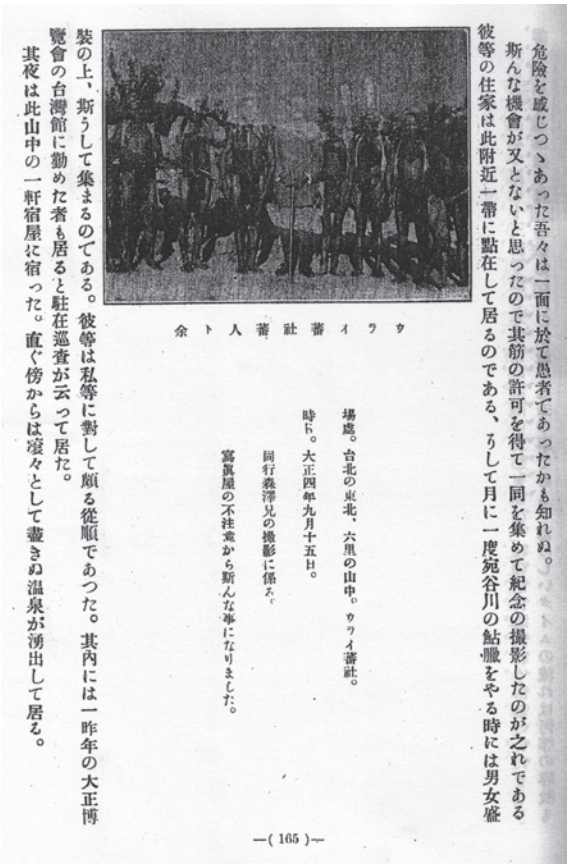
危険を感じつゝあつた吾々は一面に於て愚者であつたかも知れぬ。
斯んな機會が又とないと思つたので其筋の許可を得て一同を集めて紀念の撮影したのが之れである
彼等の住家は此附近一帶に點在して居るのである、うして月に一度宛谷川の鮎漁をやる時には男女盛
裝の上、斯うして集まるのである。彼等は私等に對して頗る從順であつた。其内には一昨年の大正博
覽會の台灣館に勸めた者も居ると駐在巡査が云つて居た。
其夜は此山中の一軒宿屋に宿つた。直ぐ傍からは滾々として盡きぬ温泉が湧出して居る。
ウライ蕃社蕃人ト余
場處。台北の東北、六里の山中。ウライ蕃社。
時下。大正四年九月十五日。
同行義澤兄の撮影に係る
寫眞屋の不注意から斯んな事になりました。
—(165)—

図４　第 13 期生・江西東線班の旅行記「江西東線」における
烏来訪問の箇所（一部）

11）たとえば台湾に関するものとしては（松田、2003）、（松田、2014）・（山路、2008）など。

蛮人」が“見世物”あるいは“展示物”として紹介されていた。1903 年の第 5 回内国勧業博覧会で日本の博覧会史上初の植民地パビリオンとなったのは他でもない「台湾館」であり（松田、2003）、そこには、蕃人の展示が含まれていた。1935 年の台湾博覧会では、歌謡や舞踏の実演が好評を博している（松田、2014：196 － 199）。書院生の中では、たとえば 1915 年に烏来を訪問した第 13 期生が、同地に「一昨年の大正博覧會の台灣館に勤めた者も居る」と記している（図 4）。

博覧会イベントと深く関連する観光の領域でも、蕃人の存在は重要な役割を果たしていた。1931 年に鉄道省が、1937 年に総督府交通局が台湾遊覧券をそれぞれ発売しているが（曽山、2003：109 － 111）、その訪問可能地域には、日月潭や阿里山、烏来など、蕃人の居住区がいくつか含まれていた。1930 年代には、阿里山やタロコ地区が国立公園化され、そのプロセスの中で蕃人の存在は国立公園の「風景」の構成要素とみなされていった。蕃社の視察や歌謡・舞踏の観賞は「台湾旅行の『目玉』」となり、「『台湾らしさ』を保持する存在」と位置づけられていた（松田、2014：230）。

1934 年発行の『台湾鉄道旅行案内』には「蕃屋」や蕃人の「杵歌」の写真が掲載されているし、「蕃人の話」という節では蕃人の概要が 3 頁にわたって説明されている（台湾総督府交通局鉄道部、2012：33 － 35）。後述するように、蕃人の「杵歌」は書院生も観賞しているが（図 5）、日月潭では 1934 年ごろにはすでに独木舟とともに観光アトラクション化していた。屋外の湖畔に観光客のために臼があらかじめ据えており、観光客の求めに応じて杵歌を披露できるようになっていた（曽山、2003：247）

このように、蕃人の存在は帝国日本下でよく知られた事実であったようであり、書院生にとっても「蕃社」の訪問は魅力的な観光行動となっていた。蕃人がすでによく知られた観光アトラクションになっていたとしても、入山許可証を入手し、グループで険しい山道を進み、首狩で知られた民族の村を訪ねるという行為が冒険心をくすぐるプロジェクトであったことは想像にかたくない。蕃社訪問が、台湾で「日本」に浸かる者が大陸で調査する仲間に対して自らの「冒険」を誇示する道具として作用したという（深）読みも可能であろう。1939 年に新高山を登った第 36 期生は、下山途中で蕃人とすれ違う際に「ひよつとしたら命がなくなるかもしれぬ」と心配し、その遭遇を「いい經驗と云ふよりも氣持ちの悪い經驗である」と語っている。その二年後の 1941 年、霧社から合歓山への移動中に蕃人と出会った第 38 期生も同様の恐怖を記している。

> 突然「お早うございます。」とかはいい聲がする。頭を上げて見れば、兩ほほ、下あご、額に入墨をした、跣足のグロテスクな女である。蕃人だ。宿の主人が話してくれた、昭和五年日本人百五十名皆殺しの霧社事件を思い出してゾツトして急いで道をよける。女は悠々と去り、一行唯呆然と之を見送る。一人だったら『助けて

くれ』とどなつて一目散で逃げたかも分らぬ。清浄な山をけがされた様な氣がする。

蕃社を訪れることができなかった書院生には、列車内から見える景色に、「生蕃が住んで居たろうと思はれる竹藪や樹林」[12] を見出す者もいるし（第 10 期生・1912 年）、訪問がかなわず、「未練」な気持ちを引きずる者もいる（第 14 期生・1916 年）。

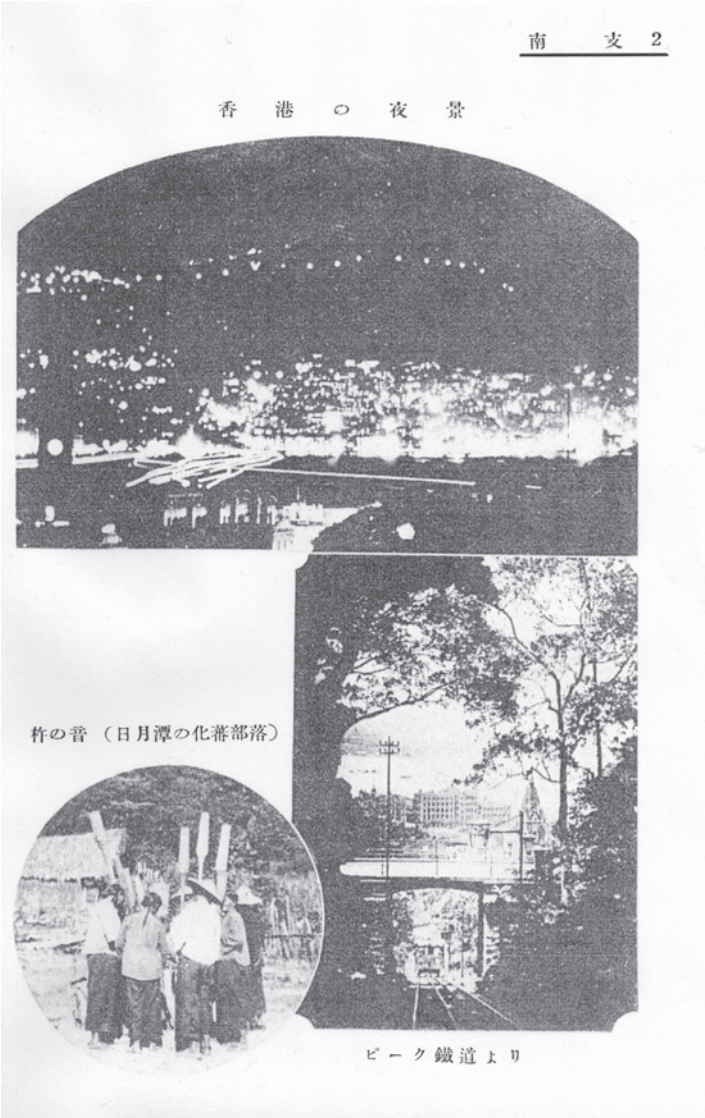

図 5　第 30 期生・南支沿岸台湾調査班の旅行記「A TRIP TO THE SOUTH」に掲載された「杵歌」の写真

12)「生蕃」とは、ここでは漢化の程度が低かった山地の先住民のこととしておく。

一方、見事に蕃社訪問を果たした書院生たちは、蕃人に対してみな同じ反応を示す。すなわち、恐怖心あるいは警戒心を抱いているのであるが、蕃人と実際に出会ってみて、蕃人らが実はもはや野蛮ではなく植民地統治に従っており、そのうえ、礼儀正しく、人情もあって、自分たちと同じ人間なのだと知るというパターンである。

こうした「人間性」が総督府の理蕃政策によるものだという考えは、記述の端々に垣間見ることができる。たとえば第13期生・1915年は、蕃人の丁寧な礼節とその「頗る従順」な態度に驚き、危険を感じていた自分たちが愚者だったのかもしれないと反省している。また、第15期生・1917年は蕃人というと「人喰い鬼」を想像していたが、疲れ果てた書院生をいたわる人情に接して感銘を受けるし、帰路偶然出会った蕃人が巡査に敬意を表したことに驚く。牡丹社事件からほとんど半世紀たったころでも「人食い人種イメージ」に言及する必要があったことは興味深い。

1922年に烏来を訪れた第20期生にいたっては、烏来を薄気味悪いところと思っていたが、実際にたずねてみれば「仙境楽園」だったとまで言っている。烏来には小学校、旅館、公共宿舎があり、みな日本語を使うし、容貌は本島人より日本人に似ているという。彼らは、蕃人の子供たちと童謡を歌うなどして交流を深めている[13)]。

こうした蕃人の人間らしさを日本による植民地統治の賜物と結びつける記述は珍しくない。その好例が次の第29期生・1932年によるものである。蕃人は「外貌如何にも生蕃の本領を発揮して今にも食ひつくされさうだが総督の理蕃政策よく行き届いて、全く日人には馴れ、一行を見れば言葉こそ発せぬガニコニコとして頭を下げて通り過ぎる。」

第20期生･1922年は「蕃女」について述べているが､基本的に同じ図式に則っている。すなわち､「生蕃の雌」というと、ホッテントットやブッシュマンの「醜女」を想像する人がいるかもしれないが、実はそれらとは違って、美しいものは美しい。また「生蕃の女」といっても、やはり人間であり、恋はするものだ――。

このように蕃人との生の触れ合いとでも呼びたくなるような記述がある一方で、前述のように､蕃社が植民地台湾においてすでに観光名物として一定の地位を確立しており､“観光客ずれ”した蕃人と接した書院生もいる。1932年に日月潭を訪れた第29期生は、本島人の船頭をとおして蕃人と交渉し､「有名な杵聲」を演奏してもらっている。

蕃人の写真撮影は当時すでにメジャーな観光アトラクションだったようだ。日月潭では撮影料金が日常的な漢人服の場合10銭、民族衣装の「正装」で20銭と設定され（曽山、2003：247)、価格が体系化されていた。1931年第28期生は、烏来蕃社で撮影回数に応じて小銭を請求されて、蕃人が「餘りに人ずれ」しているとぼやいている。書院生は蕃人観光を通じて、前述のような自分たちと同じ人間らしさとともに、いわばもう一

13）植民地台湾において植民地官吏らが先住民に対して「純真無垢」や「可愛い」というレトリックを用いたことが報告されているが（山路、2004)、こうした記述を書院生の報告の中に見出すのは困難である。

つ別の人間らしさ（ネガティブなものであるが）を蕃人の中に見出しているのである。この第 28 期生は、まるで意趣返しであるかのように、蕃人の生活で珍しいのは入れ墨と「變てこな名前」のみだと書き綴っている。

Ⅳ．おわりに

以上見てきたように､書院生にとって台湾は「支那」ではなく「日本（の一部）」であった。書院生が台湾で求めたのは「支那の台湾」ではなく、「植民地で再現された日本らしさ」や「日本による植民地体制」であった。蕃人観光も、一見「日本」と無関係に見えるが、そこで書院生たちが見出したのは、日本統治下でもはや野蛮ではなくなった蕃人像であったり、日本人観光客が増えたために、観光客ずれしてしまった蕃人たちである。

ここに、大旅行の他調査地と異なる台湾の特性があるように思われる。たしかに台湾が大旅行の寄港地や通過地域になることは珍しくなかった。けれどもその一方で、台湾は中国ではなかなか味わうことができない「日本」が存在する場であった。そのために、東亜同文書院の書院生たちが中国研究の集大成の場として台湾にまなざしを向けることは稀になったのであり、大旅行の調査目的地にはほとんどなりえなかったのである。

【参考文献】

小熊英二　1998『＜日本人＞の境界：沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮　植民地支配から復帰運動まで』新曜社
片倉佳史　2010『台湾鉄路と日本人：線路に刻まれた日本の軌跡』交通新聞社
加納寛　2013「大旅行調査から見る東南アジアと日本」『同文書院記念報』22 別冊①
高成鳳　1999『植民地鉄道と民衆生活　朝鮮・台湾・中国東北』法政大学出版局
近藤正己　1996『総力戦と台湾：日本植民地崩壊の研究』刀水書房
曹大臣　2007「台湾総督府の外事政策：領事関係を中心とした歴史的検討」『昭和・アジア主義の実像　帝国日本と台湾・「南洋」・「南支那」』（松浦正孝編）ミネルヴァ書房
曾品滄　2011「日本人の食生活と『シナ料亭』の構造的変化」老川慶喜・他編『植民地台湾の経済と社会』
曽山毅　2003『植民地台湾と近代ツーリズム』青弓社
台湾総督府交通局鉄道部　2012「台湾鉄道旅行案内」水谷真紀編『台湾のモダニズム』ゆまに書房
東亜同文書院（編）　2006『東亜同文書院大旅行誌』シリーズ（雄松堂オンデマンド）。
藤田佳久　1998『中国を超えて』（東亜同文書院・中国調査旅行記録）大明堂
藤田佳久　2000「『幻』ではない東亜同文書院と中国研究」『東亜同文書院　中国大旅行調査の研究』大明堂
藤田佳久　2007『東亜同文書院生が記した近代中国』あるむ
藤田佳久　2011『東亜同文言院生が記録した近代中国の地域像』ナカニシヤ出版
藤田佳久　2012『日中に懸ける：東亜同文書院の群像』中日新聞社
卞 鳳奎　2013「日本統治時代台湾における日本人エリートの海外経験について」『或問』第 24 号、117-138 頁

松田京子　2003『帝国の視線：博覧会と異文化表象』吉川弘文館
水野直樹　2004「序論：日本の植民地主義を考える」『生活の中の植民地主義』（駒込武・他編）人文書院
矢内原忠雄　2001「帝国主義下の台湾」若林正丈編「矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』精読」岩波書店
山路勝彦　2004『台湾の植民地統治：＜無主の野蛮人＞という言説の展開』日本図書センター
山路勝彦　2008『近代日本の植民地博覧会』風響社
若林正丈　2001「解説」「矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』精読」岩波書店